

中国ブロック記念講演

9月30日 メルパルク広島

生活環境としてオフィスを考える

中山勝矢 広島工業大学名誉教授
財団法人 広島市産業振興センター 先端科学技術研究所 顧問



オフィスは単なる仕事場ではなく、生活の一部としての仕事が行われる場であり、社会的に協同して働く場である。

一方、オフィスは生産性、言い換えれば仕事の効率を上げなければいけない場でもある。しかし、効率ばかりが求められて、人間関係が悪くなっていいという道理はない。生活のかなりの時間を過ごす場がオフィスである。だからこそ、その生活環境は、働いてよかったという実感を得られるような、あるいは自身の成長が感じられるような場にしていなくてはならない。

オフィスをシステム的に考える

ニューオフィスの一つのチェックポイントとして与えられているものに、照明や1人当たりの執務面積、換気・床材・調度品等の指標がある。しかし、そろそろ、そういうものを超えて、もう少しグループの形成であるとか、情報の流れがスムーズであるとか、システム的にオフィスを考える必要があるのではないかと。

ニューオフィスを視察するとき、執務空間だけを見ていたのでは事足りない。休憩室や更衣室・食堂・トイレ等、オフィスを構成しているすべてのものに十分に気を遣っているかどうか。それが重要なことである。

経営のトップや建物の総管理者が、どういう理念で執務空間をはじめとするそれぞれの空間を調えたのか。

それが伝わってくるオフィスづくりが、何よりも大切なことではないか。

たとえば、執務空間は非常に豊かな面積をとっているものの、休憩室がせいぜい喫煙室の延長でしかないというオフィスもある。ほとんど休憩室というものの意義が考えられていないのである。

トイレは総じて男性用のほうが素っ気ない。つまり何も置いてないというのがほとんどである。

それに比べ女性の方は、竣工間もない頃は何も無いが、1年ぐらい経って視察で何うと何かしらが置かれている。歯ブラシや化粧品など個人の持ち物が段々増えていくケースが多い。食後必ず歯を磨くという理由で歯ブラシを置いてあると聞いた。しかし、である。お客さんも来る場所にせよ個人の持ち物を置いて平気でいられるのだろうか。

ある企業で、そのことを指摘したら、社長の方が早速、籐製の小引き出しの付いたテーブルをポケットマネーで用意したという。その気配りは社員に伝わり、生活の場としてのオフィスが楽しくなる。そういうことを通して企業の文化は育まれていくのではないかと思う。

オフィス空間と建築の一体化

更衣室やトイレをオフィスとは別なものとして考えるのか、それともトータルのものとして考えるのか、その差は大きい。

そこに働く社員が文化的により向上するために、経営のトップ、ないしは総務が考えないといけない問題であろう。

つまり、オフィスができあがった後、その場をどう使っていくか。今後、そのソフトがますます問われていく。

いまオフィスには、単なる事務所としての快適性だけでなく、IT化による効率性、環境配慮による社会性が求められている。事実、ここ数年の中国地方の日経ニューオフィス賞受賞オフィスを見ても、相当工夫されてきている感を抱く。

ただオフィスをつくるだけではなく、そのオフィスならではの課題に取り組み、その回答がオフィスに投影されている。

その回答とは業態に関連するものであったり、環境配慮や町民サービスであったりと様々だが、オフィスは年を追うごとに確実に内容が充実、当初想定していたものよりはるかに濃いものになってきている。

しかし、私は最近、もう一步踏み込まないといけないのでは、と考えている。オフィスをオフィス空間としてだけでなく、建築と一体で考えないといけないではないか、と。それを進めていくことにより、生活の一部としての仕事場が、より豊かな、いいものになっていくのではないかと。